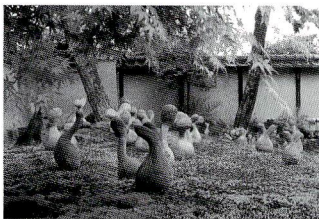
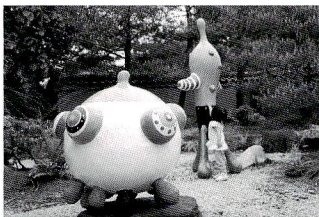


発泡スチロールをカッターなどで荒削りした後、仕上げに使うのはペンキがし用の刷毛。いろいろ試したものの、これが一番キレイになるのだとか。スポンジは、塗った土を均すのに使う。これ、左官屋さんから伝授されたテク



'08年5月に建仁寺禅居庵にて開催された「京都現世美術館2008」に出品した「たましいダンス」。妊娠中だったことから回廊的なイメージが湧き、スケッチの過程で「エネルギーの魂」=「魂」に行き着いた。その数なんと80個!



'01年6月、ワコール公募OPPAI ART LAB.に出品した「おっぱいロケット」は、審査員特別賞を受賞。「輝く未来を信じる女性はいくつになっても魅力的」という想いから、素敵な星へと飛んでいけるパワーを表現した作品に

京 KYOTIAN I.D.

京のおきばりさん

取材・文/山田涼子 撮影/石川奈都子

作家

吉田マリモ

YOSHIDA MARIMO

【プロフィール】京都府京丹後市生まれ。京都芸術短期大学を卒業後、ディスプレイ制作会社に入社。その後、企画・デザイン会社勤務を経て、'04年独立。「プロセスを大切にモノづくり」をテーマに、ジャンルにとらわれない活動を展開する。'07年6月より定期的にモノづくりワークショップも行う。'08年7月下旬にはふたり目を出産予定。

モノを育てるような感覚で モノをつくるということ

小学生のころからのあだ名「まりも」の名前で、様々なモノづくりを展開する彼女の作品には、やわらかく、ごくナチュラルな曲線を持つものが多い。「おっぱいロケット」然り、「たましいダンス」然り。初めて目にするフォルムでもどこか懐かしい印象を見る者に与える。それは不思議と、真ん丸いトマト、めっちゃやでつかいキウウリやナスなんかを連想させる。なぜなら、「トトロの世界のような場所」で育ってきた「記憶と体験が、彼女の根底にあるから。自身の作品を「アートというより、生き物」と表現するだけあって、「モノづくりは野菜を育てている感じ」だという。この日彼女が見せてくれた作品（メイン写真参照）も、いましがた畑から収穫してきたように、土の上にも置けば「生えてくるみたい（笑）」とフォトグラファー。確かに、「ジャックと豆の木」の豆みたくはある。

大学時代は油絵を専攻していたものの、「絵は同時に後ろ側が描けない」という理由から、立体の世界へ。「2回生からは絵を描いてなかったです（笑）」というほど、立体造形物に惹かれたのは、より自然に近い感じがあったから。家族が皆モノづくりに携わっているという環境もあってか、卒業制作では中に人が入るかまぐらのような作品を提出。土のぬくもりに、彼女はずっと魅せられていたのだ。育った環境からの影響に抗うことなく、おもねることなく、ただ受け止める。感謝の心をなくさず、しかしそれをあえて武器にはしない。そういった潔さが、マリモ作品の魅力かもしれない。

「アート然としていなくて、でもアートだとしてくりくるモノ」——彼女の作品を言葉で説明するのは至極難しい。ギラギラした自己主張はない。なのに、じわじわとあつたかい気持ちになる。それは、彼女自身の印象とも重なる。健康やかなエネルギーを表現する「たましいダンス」にしても、「子どものお腹を見ていて」辿り着いた曲線がユニークかつ愛おしい。子育てしながらの制作活動は大変では？と言われることも多いが、「もらえぬモノも多い」と母の顔。

子どもたちと接しながら、いま興味を抱くのはランドアート。公園などの空間で、子どもたちが発想を膨らませて遊べるモノをつくってみたい。それは、引いてはモノを通して人とつながりが生まれ、可能性が広がるコミュニケーションの場をつくるということ。「モノづくりから生まれるコミュニケーション」こそ、彼女が大事にする想いなのだから。

information

吉田マリモ公式HP
http://www.marimo-net.jp/

『京都現世美術館2009』
http://www.tooma.info/
来年も出品決定!